

Eternal Star 4

綾瀨麻結

第一章 艶めく宴の果てに

——十一月下旬、大阪。

天高く馬肥^こゆる秋。暦の上では冬になり、紅葉^{もみじ}の葉は徐々に鮮やかな赤い色に染められて、情緒あふれる風景へと変わり始めていた。

今はまさに、行楽が楽しい季節。本格的に冬将軍が到来する前に、日本の秋を五感で楽しもうと計画している人が多いのだろう。

まだ朝の六時だというのに、大阪駅構内は、高速バスターミナルに停まっている観光バスに向かうグループや、お洒落な登山服を身に付けた女性たちなどで賑わっていた。出勤するサラリーマンや、夜勤明けで帰宅する人よりも、行楽を楽しもうとしている人の方が多いように見える。

水嶋グループ大阪支社秘書室に勤務する鈴木千佳は、その光景に口元を綻ばせた。一泊用の小さなキャリーバッグを引き、貴重品が入ったショルダーバッグを斜め掛けをしている千佳も、その人たちと同じように心が浮き立つていたからだ。

カフェ内の柱に貼られた鏡がガラス越しに目に入ると、千佳は一瞬足を止めて自分の姿を見つめた。胸元がV字にあいた白のブルオーバーセーターに、黒のダウンジャケット。黄土色のコードユ

ロイ生地のハーフパンツにトレンカ型のタイツ、そしてヒールのないウエスタンブーツが目に入る。

千佳が普段好んで着る服とは全く違つて、今どきの若者らしい格好だつた。

ファストファッショニのお店に入るなり、高校生の妹の実佳が「お姉ちゃんは若いんだから、もつといろいろな服に挑戦しなくつちゃ。いつもの服も大人っぽくていいんだけど、今回は……ね」と言つて見立ててくれたのがこの服だつた。

はじめはこんな色合いの服ではなく、原色に近い服を次から次へとカゴに入れられた。派手な色の服は着ない千佳が、すかさず元の場所に戻す。そのたびに、妹は肩を落とし、ため息をついた。結局、お互いが妥協し合つて今着ている服に落ち着いたのだが、千佳は家を出る前から着慣れた服に着替えたくてどうしようもなかつた。不思議なことに、環状線の電車に乗つたころからあまり気にならなくなつたが。

慣れつて必要なかもね——と苦笑いを浮かべ、再び歩き出そうとしたとき、ショルダーバッグに入つてゐる携帯が突然鳴り出した。急いで携帯を取り出して、液晶画面を確認する。そこに表示されている名前を確認した瞬間、千佳は頬を染め、口元を綻ばせた。

「もしもし」

『俺だ』

「ええ、わかつてる」

機械越しとはいえ、まるで耳元で囁かれてゐるように感じ、千佳の軀は喜悦からブルッと震えた。誰も見ていないのに、恥ずかしさを隠すように俯いて甘いため息をつく。ここがどこなのかわかつ

ているのに、甘美な電流がお尻から脳天へと突き抜け、千佳はその心地良い波に、もつと浸りたくなつてしまつた。

一ヶ月前からずつと会つていない、身も心も捧げてゐる彼氏からの電話となれば、軀が疼くのも当然かもしれない。

東京で暮らす恋人の水嶋優貴とは、現在遠距離恋愛中。元々東京で働いていた千佳が大阪に出向し、優貴と遠距離恋愛することになつた原因是千佳にあつた。

大阪に住む両親が入院したことを知つた千佳は、優貴に相談しようともせず、一人で悩み、勝手に大阪支社への転勤願を提出してしまつた。その大阪支社には、千佳に好意を寄せている茂庭慎太郎がいると知つていたのに。

結果、千佳が初めて心を許し、全てを捧げるほど愛した優貴から別れを告げられた。それが、今年の初夏のことだつた。

優貴は水嶋グループの御曹司の一人。将来は、どこかの令嬢を妻にする。いつの日か別れの日が訪れると思っていた。だから、その時期が思つていたよりも早くなつただけだと、千佳は自分に言い聞かせてゐた。

でも、彼の子供を子宮外妊娠で失い、悲しみから逃れるように茂庭と付き合つたことで、千佳は初めて心の奥に閉じ込めていた自分の気持ちに気付いた。

優貴のことを、心から愛していることを……

だからこそ、優貴にヨリを戻したいと言われても、千佳は頷けなかつた。側にいられるだけで

「幸せ」とは、もう思えなかつたから。未来の妻のもとへ歩いていく優貴の後ろ姿を、笑顔で見送ることなんて絶対にできない。それならば、今、離れた方がいいと思つて、復縁を迫る優貴を、一度も拒んだ。

彼を愛する気持ちがある以上、どうあがいても逃れられないというのに……

『今日出発だつただろ？ もう集合場所にいるのか？』

優貴の声に込められた今までにない優しさが、甘いさざ波となつて千佳の心へと伝わつてくる。

「……ううん。まだ大阪駅の構内よ」

再び付き合うようになり、今まで自分を縛つていた心の枷かせを取つ払つてからというもの、彼は傲慢な態度を取ることをやめ、真綿で包むように優しく接してくれるようになった。千佳は、優貴の態度が、これほどまでに変わるとは想像もしていなかつた。

今の付き合い方は、以前とは全く違う。千佳との未来を考えている……と彼がはつきりと口に出してくれたから？だから、千佳に頻繁に連絡を入れてくれるようになったのだろうか？

優貴が示してくれる愛情に、千佳の口元がさらに綻ほころんだ。

「集合時間まであと十五分ぐらいあるけど、もう行つておこうかなつて思つてるわ」

『そうだな』

千佳が所属している秘書課は、今日から社員旅行だつた。一泊二日で、群馬県の草津温泉くさつおんせんへ行くことになつてゐる。そのことを優貴に話したのは一週間も前なのに、出発する時間まで覚えていてくれたなんて信じられなかつた。ほんの些細なことなのに、嬉しくて堪らない。

「……本当だつたら、優貴と一緒に旅行へ行きたかった」

心に秘めておくことができず、思わず本音を漏らす。吐露した途端、恥ずかしさを覚えて、千佳は頬を染めながら視線を落とした。

そのとき、左手の薬指にあるリングが目に入った。将来を誓い合つた証として贈られたエンゲージリングを見るだけで、彼への想いが熱い炎となつて燃え上がる。

素直な気持ちを表に出すと、優貴は喜んでくれる。だから、何も恥ずかしがることはない。

自分の気持ちに軽く頷いたとき、彼の声が聞こえた。

『千佳……、俺も同じ気持ちだ』

もどかしい気持ちを感じさせるように、優貴の声は掠れていた。

『そう言ってくれるなんて、わたし……とっても嬉しい』

気持ちを告げるだけでは物足りない。優貴の男らしい大きな手を掴むように、千佳は携帯をギュッと握り締めた。真珠を抱えた天使のストラップが反動で揺れて、千佳の手の甲を軽く叩いてくる。“いつまでイチャイチャしているの！”と伝えるかのように。

千佳は忍び笑いを漏らして、構内から少し明るくなつた外へ視線を向ける。そろそろバス乗り場へ行かなければならぬ。だが、その前に一つだけ優貴に訊きたいことがあつた。

『ねえ。優貴の予定なんだけど、今日は名古屋なごやだつた？』

『いや、急遽東京きゅうきゅうとうきょうで仕事をすることになつた。何故だ？』

いきなり優貴のスケジュールを訊いたので、きっと不審に思つたのだろう。問ひ質すような優貴

の声音に、千佳は背筋をピンッと伸ばした。

「ううん、聞いてみただけ。気にしないで」

訊いてしまったことを少し後悔していると、今度は優貴が千佳の機嫌を伺うように静かに口を開いた。

『宿の変更はないな？……『彩の庭』でいいんだな？』

どうしてそんなことを訊くの？——と不思議に思いながらも、千佳はゆっくり頷いた。

「ええ。新幹線で一度東京へ出るか、それともバスにして宿をグレードアップするか、秘書課内で多数決で決めたぐらいだもの。そう簡単に変更はしないと思うわ」

『わかった。……じゃ、社員旅行を楽しんでこい』

「うん、楽しんでくるわ。……あつ、待つて！ 明後日の二十三日だけど、大阪で会えるのよね？」

千佳が大阪へ戻つてくる二十二日は無理だけど、その翌日は会えると優貴は言つてくれた。そのことを、もう一度確認しておきたかった。

『ああ。……大阪へ行く』

その答えに、千佳はホッと胸を撫で下ろした。ショルダーバッグには、優貴が大阪で借りた賃貸マンションの合鍵が入つてゐる。二十二日は自宅には戻らずに直接マンションへ行つて、翌日に彼が來るのをそこで待つ予定だつた。もちろん、そのことは優貴には内緒だ。

『じや、今日もお仕事頑張つてね』

まるで愛を囁くように優しく言うと、千佳は通話を切つた。

「さあ、遅れないように集合場所へ行かないとな」

携帯をショルダーバッグに入れると、キャリーバッグを引っ張つて、千佳は集合場所となつてゐるバス乗り場へ歩き出した。

進んでいくうちに、大型バスが何台も停車しているのが見えてきた。秘書課に割り当てられたバスは四号車と五号車で、秘書室は五号車となつてゐる。五号車の乗降口に立ち、手に紙を持つて出欠の確認をしている女性は幹事の一人、入社四年目の門倉絵里奈だつた。

千佳の姿を見るなり、門倉は元気良く手を上げて微笑む。胸まで届く茶色い巻き毛が、軽やかに揺れた。

「おはよう！ 昨日の雨が嘘みたいにいい天気になりそうね。本当に旅行日和だわ」

「楽しく過ごせそうですね」

トランクルームに荷物を積んでいるバスの運転手にキャリーバッグを渡すと、千佳は門倉に向き直つた。彼女は「早く源泉かけ流しの温泉に入りたいわ」と言いながら、うつとりした表情を浮かべている。その表情につられて、千佳も思わず温泉に浸かるところを想像してしまい朗笑を零した。

「一人とも同じ気持ちですね——と門倉に笑みを向け、千佳はバスのステップに足をかけようとした。だが、一度上げた足をゆつくりと地面に戻すと、システム開発部技術課の社員たちに割り当てられている三号車のバスに目を向けた。

水嶋グループの社員旅行は、リストアップされた旅行先から部署ごとに行き先を選べるシステムになつており、秘書課は十数件もの候補地の中から草津温泉を選択した。システム開発部技術課も

同じ場所を選んだため、二つの部署は同じ日程で社員旅行へ行くこととなつたのだ。

つまり、ほんの数週間だけ付き合つた茂庭慎太郎も一緒にいることになる。

候補地は他にもたくさんあるのに、まさか同じ草津温泉になるとは思つてもみなかつた。

これでは茂庭と、必ずどこかで顔を合わせることになる。宴会や、自由時間で……

茂庭とはきちんと別れているけれど、優貴との恋を応援してくれた彼には、優貴と復縁できたことを伝えておくのが筋というものかもしれない。それだけではなく、茂庭を左遷に追いやつた優貴の行動も謝り、彼が本社へ戻れるように尽力すると伝えなければ……

「ちょっと鈴木さん！ 早く入つてよ。出発が遅れるでしょ！」

ハツと我に返り後ろを振り返ると、ベリーショートで背の高いもう一人の幹事、佐々木唯子がいた。

「ご、ごめんなさい！」

門倉は温和で人当たりがいいけれど、門倉と同期の佐々木は気性が激しいので、あまり怒らせない方がいい。千佳はもう一度彼女に謝つてからバスに乗り込み、既に着席している先輩たちに朝の挨拶をしながら、指定された座席に向かつた。

「おはようございます」

窓際の席に座る北川鮎美に挨拶をし、千佳はその隣に腰を下ろした。彼女とは同期で、水嶋グループの新入社員研修で何度か話したことがある。特に仲がいいというわけではないけれど、今回は同室なので一緒に過ごす時間が多くなるだろう。

「聞こえてたよ。鈴木さん、佐々木さんに怒鳴られてたね」

北川がクスクス笑うと、緩やかなパーマをかけた肩までの髪が軽やかに揺れた。大きな瞳をケルツと回転させる北川に、千佳は苦笑いを浮かべる。

「この二日間、佐々木さんの気分を害さないように努めます」

「わたしもそうする！」

力強く頷く北川に笑みを向けてから、千佳はショルダーバッグを膝に置いて深くため息をついた。バスのドアの閉まる音が車内に響く。エンジンのかかる音が聞こえたと思ったらバスはスムーズに発車し、バスガイドからマイクを受け取つた門倉が立ち上がつた。

「おはようございます、幹事の門倉です。出発時間までまだ数分ありましたが、システム開発部技術課の皆さんも揃つっていましたので、今から出発します！ 到着するまで、想像しているよりも長いと思いますが、車内でも楽しく過ごせたらと思っています。では、今から朝食のサンドウイッチとジュースを配ります」

門倉はマイクをバスガイドに手渡すと、佐々木と共に朝食を配り始めた。

「おはようございます。本日は、近畿観光バスをご利用くださり誠にありがとうございます。運転手の松木、わたしバスガイドの上田が群馬県草津温泉までご一緒させていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします」

バスガイドと運転手に向けて、拍手が起つた。

「今回は約七時間かかる長距離移動です。バスの振動で酔われて気分が悪くなれたり、急を要することも起るかと思います。そんなときは、遠慮なくおっしゃつてくださいね。さて、このバス

は名神高速に入つて一路群馬県へと向かいますが、今日は朝が早かつたので、眠たい方もいらっしゃると思います。八時三十分まで、どうぞゆっくり過ごしてください」

バスガイドの上田が頭を下げる、もう一度拍手が起こつた。その拍手がまばらになつたころ、千佳と北川の手元に、大阪駅構内にあるカフェの手作りサンドウイッチとジュースが届いた。

「こここのクラブハウスサンドウイッチ大好きなの！ ちょっと食べて、寝よつか」

「ええ、そうしましょう」

北川の意見に賛成すると、彼女に続いて千佳もウェットティッシュの包みを開けて手を拭う。

初つ端から佐々木に怒られることになつてしまつたが、千佳の気持ちはもう草津温泉に向いていた。バッグに入つた手作り地図を思い出しながら、千佳は鶏の照り焼きが挟まれたサンドウイッチを一口頬張り、溢れ出る肉汁の旨みに感嘆の声を漏らした。

このとき、草津温泉で起きる出来事がきっかけとなつて、これから的一年が大変なことになるなんて、千佳は想像すらしていなかつた……

——群馬県草津温泉。

「うーん！」

バスから降りると、凝り固まつた躯をほぐすように、千佳は大きく伸びをした。立ち寄つたサービスエリアでも躯を動かすようにしていただけれど、やつぱり約五百キロメートルもの距離をバスで移動するには少々こたえる。深夜の高速バスに乗り慣れているから大丈夫だと思っていたのに。千

佳は自分の体力のなさを情けなく思い、長いため息をつきながら小さく頭を振つた。そのとき、トランクルームから自分のキャリーバッグが出てきた。

運転手の松木にお礼を言ってそれを受け取ると、千佳は改めて周囲を見回した。

建物の間からもくもくと立ち上がり、天高く上昇していく湯気。深呼吸をするように、鼻でそのまま氣をいっぱい吸い込むと、想像していたとおり硫黄の臭いが鼻腔を刺激した。温泉地らしいその臭いに、興奮を搔き立てられる。

冷たい風が頬をなぶつていく。まだ冬本番ではないというのに、千佳は両手で躯をかばいたい衝動に駆られた。だが、日陰から太陽の暖かな陽が射し込む場所へ移動すると、春の陽だまりのようにぽかぽかとしている。

湧き立つ興奮を抑えきれないまま、千佳は湯宿“彩の庭”へ視線を向けた。

今日泊まる予定の宿は、五階建ての近代和風旅館になつてゐる。建物は柔らかな雰囲気が漂い、訪れる人々を優しく迎えてくれているように見えた。創業してから数年とまだ新しいが、贅を尽くした癒しの宿として人気があり、団体の予約は取りにくいくと先輩秘書が話していた。岩造りの露天風呂は源泉掛け流し、他にも大浴場や二十三種類のお風呂、さらに全客室に天然温泉の露天風呂が付いているとなれば、人気が出るのも当然だろう。

素敵な宿で、優貴と二人つきりで過ごしたいな——と大胆な夢が浮かび、千佳は含み笑いを漏らした。

最近の千佳は、昔ほど節約主義者ではなくなつていた。節約できるところは節約し、興味を抱い

たものは自ら進んで体験するようにしている。そうすることも、人生では大切なのだと気付いたからだ。

こんな風に考えられるようになつたのは、千佳が抱えていた重荷を優貴が全て背負つてくれたからだつた。

父の交通事故のことを知ると、優貴はまるで自分の家族のように鈴木家を心配して、交通事故対応に詳しい弁護士を手配してくれた。知らず知らずに蓄積されていたストレスと疲労感。精神的にも肉体的にも重なつていつた疲れは次第に隠せなくなり、両親だけでなく千佳の表情にまで表れるようになつていた。

だが、事故の件を全て弁護士に任せると、家族の顔色も徐々に明るくなつていき、笑顔も戻つた。肩から力が抜けで心に余裕が生まれると、優貴との未来のために自分磨きをしたいと強く思うようになった。

見るもの、聞くもの、体験できるものは、何でも興味を持つて楽しもうと……

「鈴木さん、中に入ろう」

瞳をキラキラと輝かせながら、『彩の庭』を見ていた千佳は、すぐに北川の方へ向いて軽く頷いた。

「ええ、入りましょう！」

北川に向かつて走り出そうとしたとき、千佳の視界に茂庭の姿が目に入つた。千佳が気付く前からこちらを見ていたのか、彼のその表情には愁色^{しううじゆく}のようなものが浮かんでいる。だが、千佳と目が合うと、茂庭は笑顔で手を振つてきた。思わず手を振り返したもの、自分が原因で左遷となつて

しまつたことがしこりとなり、微笑み返すことができない。

できるだけ早く謝らなければ——と思いながら、千佳は彼の視線から逃れるように北川へ走り寄つた。

仲居の挨拶を受け、エントランスを通り抜ける。目の前に広がるメインロビーに圧倒されながら、フロントから少し離れたところに並べられたソファへと向かつた。先輩や上司たちを押しのけてソファに座るわけにもいかないので、カウンターテーブルでホットドリンクをもらつた。

「あっ、入ってきたわ！」

北川が、いきなり興奮したような声を上げた。誰を見てそんなに嬉しそうにしているのか興味を抱いた千佳は、彼女の視線を目で追つた。

そこにいたのは、インテリ風の若い男性の集団。真っ直ぐに前を向き、堂々と歩くその姿から、彼らが自分に自信を持っているということが伝わつてくる。

「……彼らが、システム開発部技術課の人たち」

千佳が呟くと、北川は彼らから視線を外し、嬉しそうに頷いた。そして、意味ありげに千佳の左手にあるリングを指す。

「鈴木さんは彼氏がいるから興味ないと思うけど、今日はカップルがいっぱい誕生すると思うわ。わざわざあちらと仕組んだんだから絶対よ」

「えつ？ あちらと仕組んだってどういう意味なんですか？」

「もしかして、知らなかつた？」

何の話をしているのかさっぱりわからず、千佳は問いかけるように小首を傾げる。すると、北川は内緒話をするようにさらに側へ近寄ってきた。

「実はね、秘書課つて支社内では人気があるのよ。女子社員が私服着用を認められてる数少ない部署の一つだしね。で、こういう社員旅行はコンパにはもつてこいの機会だから、システム開発部技術課から行き先を同じにしないかという申し込みがあつて実現したというわけ」

「コンパという言葉に、千佳は思わず口をポカンと開けた。

「東京本社ではそういうことはない?」

「なかつたと思います……。わたしが知らなかつただけかもしれないけど」

ソファにふんぞり返つている上司たちのような妻帯者はともかくとして、その他の独身社員たちは皆、今回の社員旅行がどういう目的なのかわかつているのだろうか?

「わたしは、この機会を利用して絶対に彼氏を作るわ! だって、相手はシステム開発部の男性だもの。付き合つた彼が、もし企業にとつて利益に成り得るものを開発するグループにいたら……。ああ、どうしよう。凄いドキドキするわ!」

「そ、そ。……頑張つてください」

ありきたりな言葉しか返せなかつたが、北川は特に気にしていないうようで、千佳の言葉に嬉しそうに頷く。

「だからね……」

そこで声のトーンを下げるど、北川は顔を寄せてきた。

「今夜、同室の門倉さんと佐々木さん、そしてわたしが部屋に戻つてこなくとも、鈴木さんは何も心配しなくていいからね」

北川の言葉に妙な生々しさを覚え、千佳の頬は上氣して熱くなつた。秘書室の先輩も北川と同じ気持ちなのかなと思うと、視線を向けられなくなつてしまつ。目のやり場に困つた千佳は、幹事の二人がそれぞれのテーブルを回つて、宿泊カードに書き込んでもらつては鍵を渡すという作業を眺めるばかりなかつた。

それから三十分後。上司たちが次々と部屋へ向かつていき、社員でいっぱいだったロビーも静かになつたころ、門倉と佐々木はやつと千佳と北川のもとにやつてきた。

「お疲れさまです」

朗らかな笑みを向ける北川に、門倉と佐々木は大げさにため息をつく。

「まだちよつとしか仕事をしていないのに……、もう嫌になつてきたわ」

唇を尖とがらせたかと思うと門倉は諦めたように肩を竦め、宿泊カードと万年筆を千佳たちの前に置いた。佐々木が部屋のカードキーをその横に置く。千佳たちは、急いで自分の名を書き込んだ。「さあ、わたしたちの部屋に行きましょう」

本館の二階には宴会場を兼ねた大広間がいくつもある。別館は客室になつていて、三階と四階はスタンダードとデラックス、五階はデラックススイートとスペシャルスイートとなつてゐるようだつた。当然上司たちは五階を割り当てられ、秘書室や技術課の社員は三階と四階に振り分けられたが、幹事たちは毎年課長クラスの部屋を割り当てられることが決まつていた。忙しく立ち回るその

労をねぎらうためらしい。

エレベーターを五階で降りる。そこには一階のメインロビーとはまた違った異空間が広がつてお
り、千佳は思わず息を呑んだ。広い廊下の両側には小石が敷き詰められており、間接照明が温かな
雰囲気を醸し出している。部屋へ入るには、小石の上に架けられた小さな太鼓橋を渡るようになつ
ていた。

千佳は、ふと名古屋の割烹料亭を思い出した。何も知らずに資料を届けに行つた先で優貴に会い、
さらには別室へ連れていかれて奔放に愛し合つたあの日のことを。そのときの雰囲気とあまりにも
似ていたので、当時の記憶が鮮明に蘇り、千佳の心臓はドキドキし始めた。

思わず視線を周囲に走らせる。どこかの部屋から、いきなり優貴が飛び出してくるのではないか
と思つてしまつたからだ。

そんなこと、あるわけないのに——と自分を笑つて肩を竦めると、千佳は三人に遅れないように
早足であとに続いた。

角を曲がつたところで、秘書課の上司たちとすれ違つた。振り返りながら「もう温泉に入るのね」
と羨ましそうに呟く北川。そんな彼女の横顔をにこやかに見ていると、門倉と佐々木が小さな太鼓
橋を渡つた。「蓮の間」と表札がかかっている。

門倉が脇にある機械にカードキーを通し、カラカラと音を立てて引き戸を開けた。広い玄関の向
こうにドアが一つ見える。靴を脱ぐと、そのドアを開けて室内に入った。

「うわあー！」

目の前に広がる部屋に、それぞれが感嘆のため息を漏らした。二十畳ほどの空間には、独立した
和室スペース、二つのセミダブルベッド、そして応接セットが設えてある洋室スペースがあつた。
和室にある大きなガラス戸の向こうには、部屋付きの露天風呂が見える。既にお湯が湯船を満たし
ていて、すぐにでも入れそうだ。暗くなれば、宝石のように輝く草津温泉の街を眼下に見ることが
できるだろう。

「それじゃ、ここからは別行動ね」

当然のように、ベッドのサイドボードに私物を置く先輩たち。北川が千佳に視線を向けて、目を
ぐるりと回転させる。そんな彼女に苦笑いを返したが、千佳は普段から布団で寝ているので特別不
満はなかつた。和室の隅に自分のキャリーバッグを置く。

「ねえ、鈴木さんはこれからどうする？」

千佳にならつて、北川も隣にキャリーバッグを置いた。

「今夜の宴会は十九時でしたよね。それまで、温泉街を回ることにします。北川さんはどうします
か？」

「もちろん、温泉に入つて……肌をすべすべにするわ。鎖骨を見せて色っぽく、さらに頬を上気さ
せて好きな男性を射止めるの！」

そこまでして射止めたい男性が誰なのか知りたくなつたが、千佳は誹謗するような真似はせずに
「頑張つてくださいね」と呟げた。

荷物を片付けているうちに、いつの間にか幹事の二人は部屋からいなくなつており、北川も宿専

用の浴衣と綿の入った暖かそうな半纏を持つて「じゃあね」と言つて出ていった。千佳もショルダーバッグを手に取り、斜めに掛ける。

「さあ、わたしはわたしで楽しもうかな」

時刻は既に十五時前。早く行動を起こさないと、時間がなくなつてしまふ。急いでカードキーをバッグに入れると、千佳は部屋をあとにした。

宿から大通りへ出ると、千佳は町内を巡回しているワンコインバスの乗り場に向かつた。幸せそうな親子連れ、楽しそうにしている友達同士、寄りそつて歩くカップル。多くの人たちが千佳の視界に入つては通り過ぎていく。

そんな微笑ましい光景を見ていると、急に物悲しい気持ちが湧き起つてきた。千佳のように、一人つきりで行動している人など、どこにもいない。皆、誰かと楽しそうにしている。

「わたしの隣にも優貴がいてくれたら……」

最後に優貴と会つてから、まだ一ヶ月ほどしか経っていないのに、彼に会いたくて堪らない。東京で暮らしていたときは、一ヶ月に一度でもデートができるらしい方だつたのに。

我慢しなさい、明後日には優貴と会えるんだから！——と叱咤するように自分に言い聞かせる。何か楽しいことを考えようと思い、旅行後、優貴と再会してからのことを考えた。

彼のために何をするのか考えただけで千佳の口元は自然と綻び、頬はチークをのせたようにどんどんピンク色に染まつっていく。人には言えないことを想像しながら歩いていると、すぐにバス停に

着いた。数日前に下調べしておいた草津温泉についてのメモを取り出し、行きたい場所を確認する。しばらく待つてはいるが、まるで大正時代を舞台にしたドラマや映画に出てきそうなレトロなバスがやつてきた。全体的に濃い紺色をしているが、天井や窓枠は黄色く塗られていて、思わずワクワクしてしまいそうなぐらい可愛いバスだつた。

ドアが開くと、千佳はまず運転手に声をかけた。

「すみません、鶴太郎美術館入り口に停まつてもらえますか？」

宿のエントランスに置かれていたバスの時刻表には、片岡鶴太郎美術館には停まらずに通過することもあると書いてあつたので、確認しておいた方が無難だと思ったのだ。

「わかりました」

「ありがとうございます！」

空いた席に座ると、千佳は窓の外を流れる温泉街の景色に目を向けた。ホテルや老舗旅館が目に入つたかと思えば、お土産屋や飲食店が軒を連ね、その前を人々が楽しそうに行き交つてはいる。バスに乗つてから十数分、見るもの全てに興味を抱いていると、鶴太郎美術館入り口でバスが停まつた。

「ありがとうございました」

礼を言つて、バスから降りる。

「えーと……」

草津温泉街の地図を取り出して、どの方向に“西の河原公園”があるのか確認した。しゃくなげ通りの先に、バス停の名前になつてゐる草津片岡鶴太郎美術館があり、さらにその奥へ行けば目的地

の西の河原公園に行けるようだ。千佳は、足取りも軽やかに歩き始めた。

数分後、目の前に“西の河原公園”の入り口が見えた。公園へ通じる石置は豊かな自然に囲まれ、その傍らにある温泉が流れている湯川からは、モクモクと湯気が上がっている。

「ここに温泉の源泉があるのね」

観光している人たちの間を縫うように、千佳はさらに進んだ。至るところに温泉が湧き出でていて、ごつごつした岩に囲まれた湯だまりは、瑠璃の池^{（るりのいけ）}や琥珀の池^{（こはくのいけ）}と名を付けられている。

そして、公園内でもつとも目立つ源泉“鬼の茶釜”が目に飛び込んでくると、千佳は感嘆のため息を漏らした。摂氏五十度以上の源泉が湧き出しているので、湯面から湯気が立ちのぼっている。名称が入った立て札がフレームに入るよう、千佳は携帯のカメラで写真を撮った。

メールを立ち上げ、一言「温泉が生まれる瞬間よ」と打ち込むと、写真を添付して優貴に送信した。忙しくしていると思うけれど、これでちょっと肩から力を抜いてくれたら……。

優貴のことを想いながら携帯をバッグに入れると、千佳はすぐ側にある草津穴守稻荷神社へ向かつた。ここには白砂が入ったお守りがあるらしい。とても珍しいので千佳も買おうと思っていた。

たくさんの鳥居が並ぶ階段を上りきると、お社^{（おやしろ）}へ行きお賽錢^{（さいせん）}を入れた。家内安全、病気平癒、そ

して優貴の厄除けをお願いすると、その隣にある建物で目当てのお守りを購入する。

ふと空を見上げると、陽はだいぶ西に傾いていた。

東の方角から闇が迫り、冷たい風が吹いてくる。時間を見ると、十六時十五分を過ぎていた。

「やっぱり、間に合わなかつたか……」

肩を落とすものの、千佳は次の場所へ向かうために再び長い階段を下り始めた。本当は、湯もみシヨー^{（シヨウ）}や時間湯が体感できる“熱の湯”にも行きたかったけれど、明るいうちに“西の河原公園”へ行きたかつたので、後回しにしたのだ。なんとか最終受付の十六時三十分までに行けたらと思っていたが、残念ながら諦めなければならないようだ。

「仕方ないわよね。……あつ、待つて。もしかして明日一番のシヨーなら見学できるかも。出発は十時三十分だから、間に合うかもしれない」

朝風呂もいいけれど、温泉は今夜たっぷり堪能すればいい。せっかく群馬県まで来たのだから、有名な草津の湯もみは見て帰るべきだろう。

明日の予定を、頭の中で組み立てる。上手くいきそうだと思った千佳は、口元に笑みを浮かべながらさらに公園の奥へと歩き出した。

明治時代に草津を欧米に広く紹介したベルツ博士とその同僚のスクリバ博士像を通り過ぎ、さらにならずまやも過ぎる。すると、最終目的地の“湯の滝”が目の前に現れた。豪快に滑り落ちる湯は圧巻だった。

携帯を取り出して、再び写真を撮る。

「何回お風呂が入れるかしら……」

千佳の独り言は隣にいた老紳士にも聞こえたようだ。彼は肩を揺らして、笑い声を上げた。

「ワシもそう思つたよ。これほどの湯があれば、軀^{（から）}が泥まみれになつても、服が真っ黒になつても、母親は怒らなかつただろうな……とな」

独り言を聞かれた恥ずかしさから頬が熱くなるのを感じながら、千佳はその老紳士に微笑みかけた。

「今でも、お湯の量を気にせずゆっくりとお風呂に浸かりたいものです」

「じゃ、今夜はゆっくり温泉に浸かつて、日頃の疲れを癒しなさい」

「はい。では……」

携帯を開き、「滝の湯」の写真を優貴に送る。「昔も今も変わらない。同じなのね……」とコメントを打ち込みつつも、隣にいる老紳士が何故か妙に気になつた。顔見知りでもなければ、親戚でもないはず。どこかでお会いしましたか……なんて言葉をかけられるはずもなく、千佳は何も言わずに来た道を戻り始めた。

“西の河原公園”をあとにすると、千佳はしゃくなげ通りから西の河原通りへと入つた。草津のメインストリートといわれるこの通りを、そのまま三百メートルほど進めば、あの有名な湯畠に辿り着く。

宴会が始まる十九時までには、まだたっぷりと時間があつたので、立ち並ぶ商店をゆっくりと見ながら湯畠へ向かおうと決めた。

そのとき、千佳の目に“草津ガラス蔵”という看板が飛び込んだ。すかさず店に入り、光に照らされて輝くガラス細工のアクセサリーを眺める。

「とっても綺麗……」

色鮮やかな黄色と緑色で作られたトンボ玉のピアスを自分で用に、赤色のトンボ玉と同色系の組み紐の携帯ストラップを妹のために購入することにした。レジでお金を払つて包んでもらうと、千佳は再び外へ出て、散策を始めた。

木の温もりを感じさせるお店の前をそぞろ歩きしていると、今度は小腹が空いてきて食べ物ばかりが目に入つてくる。串に刺した鮎や海老が炭火で焼かれていて、とても食欲をそそる匂いがした。その隣の甘味処からは、甘い匂いが漂つてくる。

少し立ち寄つてみようかな——と思つてみると、風に乗つて醤油の香ばしい匂いが千佳の鼻腔を擦つた。一瞬でそちらに目を奪われた千佳は、匂いに誘われるよう歩き出した。串にさされているその姿は、明らかに焼き鳥。だが、それは違っていた。鶏の串焼きに見えたものは、秘伝のタレで味付けされたぬれおかきと書いてある。七味やゴマ、マヨネーズなどをトッピングされたものもあり、見てているだけで唾が出てくるほど美味しそうだつた。

「ゴマ味を一つください」

千佳は、思わず一つ購入してしまう。

「ありがとうございます」

店員から受け取ると、千佳は歩きながらそれを一口かじつた。

あまりの美味しさに足が止まり、千佳の口元に笑みが浮かぶ。さらにもう一口かじつて柔らかいぬれおかげに舌鼓したづみを打つと、千佳は再び歩き出した。前方には、あの有名な湯畠が見えていた。心を彈ませながら、どんどん歩を進める。

時刻は既に十七時を回っている。陽も落ちて暗くなつた街に、ライトアップされた湯畠が美しく浮かび上がつていた。

「うわあ、なんて幻想的なの！」

流れ落ちる湯に、ライトが反射してキラキラ輝いている。ゴミ箱に串を捨てて、バッグに入れていたウエットティッシュで指を拭うと、千佳は当然のように携帯で写真を撮つた。

優貴には「とてもロマンティックよ。一人なのがとても残念だわ」とコメントを添え、実佳には「とっても綺麗でしょ」と添える。そして、今でも仲良くしている東京本社秘書室の桜田菜乃には「何でも話せるようになつてから……一緒に社員旅行へ行きたかった」と打ち込んで、メールを送信した。携帯をバッグに入れると、千佳は湯畠の周囲を歩き始めた。観光客も湯畠に見入つたり、お土産物屋に入つたりと思い思ひに過ぎしている。

千佳も心が浮き立つたとき、無料で楽しめる足湯処が目に飛び込んできた。観光客のカップルがちょうど席を立つたので、千佳はその場所にお邪魔することにした。ブーツを脱いでトレンカを膝下まで捲り上げると、湯気が立ち上る温泉に足を浸した。冷え切った躯を心から温めてくれるその心地良さに、口から思わず至福の吐息が漏れる。

そのとき、左隣に誰かが座つた。特に気に留めずに足をゆっくり動かしていると、いきなり「千佳？」と名前を呼ばれた。

「えっ？」

千佳のことを名前で呼ぶ人は数えるほどしかいない。驚いてすぐに隣へ視線を向けると、そこに

いたのは、ほんの数時間前に宿で視線を交わした茂庭だった。

「茂庭さん！ どうしてここに？」

彼は苦笑いを浮かべ、千佳と同じように湯の中で足を揺らす。ジーンズを膝下まで上げているせいで、黒い脛毛^{すねげ}が千佳の目に飛び込んできた。普段なら目にすることもない男性の脛を見て、彼ともう少しで親密な関係になりそうだつたあの日のことが頭を過つた。

ベッドに押さえつけられ、乳房に触れられて舌で舐められたときの感触を。

もう終わつたことなんだから、思い出したりしないの！ ——と必死になつて自分に言い聞かせる。だが、一度思い出したそれはなかなか消えなかつた。

「実は、千佳が一人で宿から出ていくのを見て、追いかけたんだ。でも、なかなか声がかけられなくて……」

「えっ、わたしを？ ……どうして？」

口をポカンと開けて、茂庭の目を見つめる。

いろいろと、話したかつたんだ。あのあと、どうなつたのか……きちんと聞きたかった

茂庭は、千佳の左手薬指にあるリングを指す。

「これって、つまり上手くいったつてことだよな？ 彼にプロポーズされた？」

千佳は素直に頷いた。

「これからはケンカをしてしまつても、一人で乗り越えようつて。結婚はまだ先なんだけど」「そつか……。じゃ、俺はもう駄目つてことなんだな」

千佳は

「えつ、何？」

声のトーンを下げるボソッと呟いた茂庭の声は、千佳の耳に届かなかつた。訊き返すものの、茂庭は苦笑いを浮かべ、ただ頭を振るばかり。

「あ～あ。今夜、いいことないかな」

その言葉に、千佳はそつと茂庭の袖に手をかけた。

「ねえ、茂庭さん。あなたは知つていた？ 今回の社員旅行は、秘書課とシステム開発部が……その……」

何と言えばいいのかわからず、千佳はもごもごと言葉を濁す。それを助けるように、茂庭がはつきりと言つた。

「コンパになつてるつてこと？ ああ、知つてるよ。秘書課の女性は高嶺の花だし、俺たちシステム開発部も……いい部類に入つてると思う。自分で言うのもあれだけどさ……。まあ、お互の課が示し合させた結果がこれなんだから、別にいいんじゃないかな」

朗らかに笑う茂庭につられるように、千佳も口元を緩めた。

「わたし、実は知らなかつたの。ここに着いてから聞かされてびっくりしたわ」

チラツと茂庭を見る。ここに座つたときと比べて、かなり肩から力が抜けているようだ。足湯のせいでも、軀が温まつたのか、額にうつすら汗が光つている。手を後ろについているその姿は、だいぶリラックスしているように見えた。彼に謝るのなら今が一番いいだろうと思い、千佳は茂庭の方へ軀を向けた。

「ねえ、茂庭さん」

「うん？」

「わたし、茂庭さんに謝らなければいけないことがあるの。……優貴のことで」

不思議そうに千佳を見ていた茂庭は、優貴の名前に眉を訝しげに上に動かした。

「何？」

「茂庭さんを東京本社から大阪支社へ左遷させたのは、……優貴なの。ごめんなさい！」

頭を下げた千佳は、茂庭がびっくりしたように目を大きく見開いたことに気付かず、そのまま言葉を続ける。

「東京にいるころ、わたしが茂庭さんと食事に行つたのを知つて、彼は嫉妬して……。権力を乱用するなんて、本当に信じられなかつた。彼を罵つたわ。酷い人だとなじりもした。でも、わたしがいくらそう言つても、優貴の心をえることはできなかつたの」

面を上げ、縋るよう^{きみな}に茂庭に身を寄せる。

「優貴とは以前よりも深い絆で結ばれるようになつたけど、それとこれとは別問題よ。わたし、茂庭さんが元の場所へ……、東京へ戻れるように優貴を説得するわ。何がなんでもそうすると誓う。……ごめんね、本当にごめんね、茂庭さん！」

謝つても許されるものではないとわかつていたが、千佳はそうせずにいられなかつた。再び頭を下げる千佳の肩に、茂庭がそつと手を置く。

「千佳……、顔を上げて」

「でも、」

「いいから。さあ！」

強く押されて、千佳は顔を上げた。

「あいつを助けるのかと思うと、ちょっと複雑な気持ちだけど……千佳の心を軽くしてあげるよ」表情を歪め、辛そうに千佳を見る茂庭。彼の目を見るだけで、胸が痛くなる。もう一度謝りそうになつたとき、茂庭が口を開いた。

「千佳は、あいつが俺を左遷させたと思ってるみたいだけど、それは間違った。そもそも俺は異動ではなく、千佳と同じ出向なんだよ」

「えっ？」

茂庭の言つている意味がわからず、千佳は眉根を寄せながら彼の真意を測ろうとした。

「俺の所属している技術課に出向の辞令が出たんだ。俺は、大阪での仕事も経験してみたくて手を挙げた。入社一年にも満たない俺が選ばれる可能性は低かつたのに、その意気込みを買われて俺が出向することになつたんだ。三年という期間が終われば、俺は東京へ戻るんだよ」

「それって、つまり……」

茂庭が静かに頷く。

「あいつに左遷されたんじゃない。俺が自ら進んで大阪へ来たんだ」

転から一気に力が抜ける。千佳は膝の上の掌てのひらに視線を落とした。

優貴は、権力を乱用していなかつた。茂庭を左遷なんかしていなかつた！ そんなことは露知

らず、いつたいどれほど優貴を罵つたことだろう。彼がそんなことをする人ではないつてわかつていたはずなのに、優貴が立場を利用してそういうことをしたと千佳は決めつけっていた。

視界がどんどん霞かすみ、手の輪郭がぼやけていく。ふいに掌に焦点が合つたとき、千佳は自分が大粒の涙を零こぼしていたことに気付いた。

「千佳！」

千佳の肩を抱きしめ、茂庭はそのまま軽く撫ななでる。

「すまない。すぐに言つておけば、こんなに取り乱すことともなかつたのに……」

茂庭の見当違いな言葉にも何も言えず、千佳は頬を伝う涙を拭ぬぐいながらただ頭を振つた。優貴を疑つてしまつた自分が情けなくて涙が出てたとは、告げることができなかつた。

「ううん、大丈夫。……茂庭さんは左遷されたんじゃないって知つてホッとしたわ」

今この瞬間、千佳は優貴に会いたくて堪たまらなかつた。会つて……彼を傷つけたことを謝つて、そして何もかも忘れて本能の赴おもむくまま彼と愛し合いたい！

あと二晩も寝れば優貴に会えるとわかつていてもかかわらず、駄々を捏ねる子供のような感情が湧き上がり、千佳は思わず呻ゆめき声を漏らした。

そんな千佳の肩を、茂庭はまだ抱き続けていた。そのことにやつと氣付いた千佳が、どうやつて彼から身を離そくかと悩んでいると、助け舟のようにバッグに入つて居る携帯が鳴つた。その音に驚いたのか、茂庭の手が震える。千佳はさりげなく彼から身を離し、バッグから携帯を取り出した。携帯の液晶画面に出て居る名前を見て、千佳は泣きそうになつた。今一番会いたい人、抱きしめ

たい人、側にいてほしい人の名前がそこに表示されている。

『もうすぐ会えるから、そのときに聞かせてくれ。千佳の心に残った風景を、俺も同じように感じたい』

たったそれだけしか書かれていなかつたが、優貴も同じ気持ちでいてくれていると知つて、千佳の心が高鳴る。携帯をバッグに入れようとしたその瞬間、再びメールの着信音が鳴つた。今度は、二通も入つてゐる。

『実佳もお姉ちゃんと一緒に旅行へ行きたいよ！ でも、お土産で我慢しておくれ。いっぱいお風呂に入つてきてね』

妹からのメールを読み終えて切り替えると、もう一通は桜田からだつた。

『とっても素敵ね！ いいな、わたしは資料を抱えて走り回つてゐるのに（残業中なの）。今夜、飲みすぎないようにね。ほどほどのところで抜け出すのよ。上司にずっと付き合つことはないんだからね』

口元を緩めながら、携帯をバッグにしまう。

「友達？」

「ええ。本社の秘書室で親しくしてくれていた人と、妹から」

あえて優貴の名は出さなかつた。茂庭は優貴を“あいつ”呼ばわりしている。つまり、今もそれほどいい感情を持つていなといふことだから、ここで出す必要はないと思つた。

「そろそろ宿に帰るわ。浴衣に着替えたりしないとダメだし。茂庭さんはどうする？」

バッグからハンドタオルを取り出し、千佳は足湯から上がつた。ピンク色に染まつた足を軽く拭い、トレンカを下ろして戻す。

「俺も一緒に戻るよ」

茂庭も足湯から出たが、タオルを持つていないうで、濡れたまま靴下を履こうとする。

「これ、濡れてしまつたけど使う？」

今使つたハンドタオルを、おずおずと差し出す。千佳のその行動に、茂庭は目を大きく見開き、そして顔を真つ赤にした。

「えっ、いや……、その……ありがとう」

千佳からタオルを受け取ると、茂庭はまだ顔を赤らめたままで足を拭き始めた。どうしてそこまで赤面するのかわからなかつたが、そんな彼を見ていたら、千佳も何故か恥ずかしくなつてきた。

ブーツに足を滑り込ませ、バッグを斜め掛けにする。千佳は立ち上がりつた。さりげなく茂庭に背を向け、火照つた頬にそつと手で触れて熱を冷まそうと努力する。

「ありがとう、千佳。これ、洗つて返すから」

「いいのよ！」

すぐに振り返り、片手を茂庭の前に出す。でも、茂庭はただ頭を振つて、濡れたタオルをポケツト入れてしまつた。その行動に啞然としながら、千佳は彼を見上げる。

これだけは譲らない——と告げるよう、茂庭は千佳の目を真つ直ぐに見つめていた。何を言つても無駄だと感じ、千佳は仕方なく手を下げて肩を竦める。

「別にいいのに……」

ボソッと呟きながら足湯処から出ると、二人は肩を並べて宿へと向かった。

湯宿 “彩の庭”は高台にあるので、湯烟からは上り坂になる。宿に戻る道中、茂庭といろいろな話をしたが、どれもとりとめのない話だった。

宿に着いたとき、千佳は心から安堵の息をついた。お互い気を使い合ったような会話を、なんとか終わらせることができたからだ。

「じゃ、また宴会場でね」

茂庭は千佳に異を唱えることなく、ただ頷く。そんな彼に軽く手を振ると、千佳はエレベーターホールに向かって歩き出した。

「鈴木さん、そろそろ行こつか」

「はい」

浴衣の脇に指で触れてから、千佳は北川と同じように湯宿の半纏を羽織つた。カードキーと携帯、お財布、そして口紅とハンカチが入った小さなポーチを手に取ると、これから宴会が行われる大広間へ向かつた。

茂庭と別れたあと、千佳は一度部屋へ戻り、その後一階にある源泉掛け流しの露天風呂を満喫した。肌がスベスベになつた上に、軀の内から温められたせいで血色も良くなり、チークをしなくても頬はピンク色に染まっていた。千佳だけでなく、大広間へ向かう女性社員たちも内から輝いて見

える。男性社員の視線を集めているその光景を見ると、自分は無関係なのに妙にウキウキしてきた。

「そういえば、北川さんは……お目当ての男性社員と接触できたんですか？」

本館の二階にある大広間に足を踏み入れてから、千佳は訊ねた。

「ううん、それがね……館内を探したんだけど、彼はどこにもいなかつたの。部屋番号もしつかり

チエックしたのにね。でも大丈夫よ。彼のところへお酌しに行くから」

大広間には既に人が集まつていて、始まるのを今か今かと待っているようだつた。仲居が、開始に間に合うようお酒を運び続けている。半纏を脱ぎながら周囲を見回すと、茂庭の姿が目に入つた。楽しそうに同僚と話していたのに、千佳の視線を察知したのか、流れるようにこちらに目を向けた。まるで、千佳がそこにいると知つていたと告げるよう、優しく笑みを零す。その表情にドキッとした。千佳は笑みを張りつけて軽く頷き、秘書室の末席に座つた。

「今、彼がわたしを見て微笑んでくれたわ！」

「えっ？」

北川が嬉しそうに千佳に擦り寄り、腕を強く叩いてくる。

「わたしが目をつけてる彼よ。技術部の茂庭さん」

茂庭の名前が出て、千佳はドキッとした。

「も、茂庭さん!?」

「ええ、そうよ。もしかして、彼を知つてる？」

「……ええ、知つてます」

そう答えたものの、何かいけないことを隠しているように心臓がドキドキしてきた。

「本当に？ やつた！ わたしつてなんてラッキーなの！ ねえ、お願ひ。彼に紹介して」

両手を合わせて、必死に頬み込む北川。親しいとまではいかないものの、普通に接してくれる彼女に向かつてノーと言えるはずもない。

「ええ……」

そう言うしかなかつた。

こういうとき、「たつた数週間だけじ、茂庭さんと付き合つたことがあるの」と言うべきなのだろうか？ それとも言わない方がいい？

既に終わつた関係だから、わざわざ言う必要もないわよね——と自己完結させると、千佳は自分を落ち着かせるように深呼吸を繰り返した。

「えー。……皆様、もうお揃いでしようか？」

スピーカーから流れる、幹事の門倉の声。大広間に響き渡ると同時に、ざわざわとした雰囲気も落ち着いてくる。これに乗じて千佳は北川から視線を逸らし、門倉と佐々木、さらにシステム開発部側の幹事の二人が立つている正面へと視線を向けた。

それぞれが自己紹介を終えると、次は秘書課代表者とシステム開発部代表者の挨拶があり、それから無礼講の宴会が始まった。

忘年会や新年会とは違うので社員の出し物は一切行われないが、宿側から草津温泉の見所、食事のあとに見てほしい場所、さらに宿の施設の紹介が始まつた。その間、忙しく動き回る仲居たち。

彼女たちが上司たちにお酌(しゃく)してくれるので、千佳はそのまま座つて食事をいただくことにした。

旬の素材を活かした料理長自慢の和食膳(しょくぜん)に舌鼓(したづみ)を打ちながら、口当たりのいい日本酒を飲む。時間が経つにつれて、千佳は酔つていつた。いつも身に纏つている見えない鎧(よろい)が一つ、また一つと滑り落ちていく。会社ではいつも気を張り詰め、真剣な顔ばかりしているのに、このときばかりは聖女のように優しげな笑みを口元に浮かべていた。知らず知らずに匂い立つような艶っぽい仕草をしてしまい、茂庭だけでなくシステム開発部の人までもが千佳を興味津々に見つめてくる。

当然周囲の視線には気付かず、千佳は隣に座る北川へ目を向いた。日本酒を飲みすぎたのか、北川の目はトロンとしていて、流し目がとても艶っぽい。

「とっても綺麗だわ、北川さん」

「本当!? ありがとう！ 茂庭さんも、そう思つてくれるかな？」

その言葉に、千佳は茂庭が座つている方向へと視線を向けた。だが、茂庭は、残念ながらそこにはいなかつた。

「ええ、きつと……」

綺麗な肌、真珠のように輝く白い歯、大きな目に表情豊かな口元。女性から見ても可愛らしい北川に告白されて、ノーと言える男性はそうそいいないだろう。

酔つ払つた人が増えてきたのか、話し声もだんだんと大きくなり、広間は騒然としてきた。多くの人がお目当ての男性や女性のもとへ行つて話し始めている。即席のコンパをしようとする、誘つているのかもしない。

「やあ」

耳に届いたその声の主が誰なのか、千佳はすぐにわかつた。正面を向くと、ちょうど千佳の目の前に彼が腰を下ろすところだつた。

「茂庭さん」

意思表示するように、北川が千佳の大腿^{だいいたい}に手を載せる。

「これからさ……、俺を含めた技術部のやつら四人と飲みに行かないか?」

「行きたいわ!」

横から北川が身を乗り出し、茂庭に可愛らしい笑みを向ける。

「えっと、彼女は北川鮎美さんよ。わたしと同期なの」

茂庭は「それで?」と問うように、意味ありげに眉を上げる。千佳はそれには答えず、ただ苦笑いを浮かべた。

「わたしはもっと温泉に入りたいから遠慮しておきます。北川さんがきっと人数を合わせてくれるわ」

「つてことは、あと三人ね。任せて!」

足取りも軽やかに、北川は人数集めに向かった。残された千佳は、茂庭が何かを問う前にもう一度苦笑いを浮かべた。

「わたしのことは気にしなくていいから、皆で楽しんできて」「千佳……」

「茂庭さんも言つたでしょ。これは一種のコンパなんだつて。その場でただ飲むだけだとしても、わたし……もう優貴が嫌がることはしたくないの」

「彼はここにいない。千佳が何をしようと、誰にもわからない」

手を伸ばして、茂庭が千佳の手の甲に触れようとすると、その動きを目の端に捉^{とら}えると、千佳はゆっくりと手を引いた。

「ダメよ。優貴には正直でいたいの。遠距離恋愛をすることになつたとき、もう優貴に隠し事はないって、わたしは自分で決めたから」

はつきりと口にしたことであつてくれたのか、茂庭は深いため息をついた。

「集まつたわ!」

二人の間に漂う微妙な空氣に気付かず、北川が嬉しそうな声で話しかけながら千佳の隣に座る。

「いつ行きます?」

「……今から」

茂庭はその言葉どおり立ち上がり、千佳を見下ろした。

これでもう終わり、本当に全て終わりだね——と告げるようすに、彼は苦しげに目を細め、千佳を見つめ続ける。北川の手が茂庭の袖に触れるその呪縛は解け、二人は千佳に背を向けて歩き出した。一人きりになると、千佳は安堵を覚えて深いため息をついた。だが、周囲に誰もいなくなると今度は離愁^{りしゃう}が湧き起つてくる。

千佳を想つてくれた人が去つていく。温もりを失つたような物悲しい気分だったが、友達なら新

たな道へと進み始めた茂庭を応援するべきだらう。千佳の心が優貴にあると知り、自分の気持ちを心の奥に閉じ込めて千佳の背を押してくれたように、千佳も友達として茂庭を応援するべきなのだ。

茂庭が大広間から出てその姿が見えなくなるまで、千佳は彼の想いに応えられないことを何度も心中で謝り、そして新たな道に向かう彼の背中にエールを送り続けた。

「あの、鈴木さん？」

いきなり声をかけられて、千佳は大広間の入り口から視線を動かした。目の前に、面識のない男性が座っている。

「良かつたら、このあと飲みにいかない？」

千佳は、目をぱちくりさせて目の前の男性を見つめた。

これって、もしかして……誘われてるの？——と思った瞬間、千佳の心臓が急に不規則なリズムで鼓動し始めた。咄嗟に彼から視線を外すと、今度は遠くの方から千佳を窺うように見つめている男性と目が合う。腰を浮かせて、こちらに近寄つてこようとする男性もいた。

こんな風に、いきなりいろいろな男性から注目を受けるはずがない。そう思うのに、男性の目が銳い槍となつて、千佳の躯を突き刺すように襲つてくる。

「ごめんなさい！わたし、ちょっと具合が悪くて……」

こんな経験を一度もしたことがない千佳は、半纏とポーチを持つと慌てて立ち上がつた。彼らの目の届かないところへ逃げるためには、大広間から出るしかない。上司たちは、カラオケに行こうと熱心に話をしているし、先輩たちの中には既に席を外している人もいる。これなら、千佳が抜け

出しても誰も気にしないだらう。

一度も後ろを振り返らず、千佳は急いで大広間から飛び出した。エレベーターに乗る時間も惜しく、別館へ続く階段に足に向ける。

「えっと、鈴木さん？」

後ろから、また男性に声をかけられる。怖くなつた千佳は、聞こえなかつたふりをして、自室のある五階ではなく、三階に行き、脱兎の如く廊下を走つた。

お酒を飲みすぎて気分が悪くなつた人や、温泉に入つて逆上せた人向けに設けられた特別部屋がある。とにかくどこかに隠れようと、千佳はその引き戸を開けてスリッパを脱ぎ、ドアを開けて室内に入ると、ゆっくりと閉めた。自分の名を呼ぶ声が遠くなつていくまで、口を手で覆つてジッと息をひそめる。だが、千佳の意識は突然室内へ向いた。

何かが千佳を引きつける。生地が擦れる音、押し殺した息遣い、くちゅくちゅという聞き慣れた粘膜音。一瞬にして、千佳の顔は真っ赤になつた。

今、この半分閉まつた障子の向こうで……誰かが愛し合つてる！

「ダメ……もう、イ、クツ！」

「まだだ。……もう少し、我慢しろ」

女性の口から漏れる吐息が、すり泣きに変わる。湿り気を帯びた肌と肌とがぶつかり合う音に混じつて、激しさを増す粘膜の音。

この場所にいて、最後まで聞くなんて耐えられない。クライマックスに向かつているようなので、

入ったときと同じようにこつそりと出ていけば、室内の二人に気付かれることはないだろう。

千佳はドアを小さく開け、物音を立てないように外へ出ると、ゆっくりと閉め、逃げるようになら飛び出した。

「どこに行つたんだろう、鈴木さん」

またも自分の名が廊下の向こうから聞こえてきて、千佳は泣きそうになつた。

どうして追いかけてくるの？ 何故放つておいてくれないのよ！

心の中で悲鳴を上げながら、千佳は何度も周囲を見回し、小走りで廊下を進んだ。

こうなつたら、割り当てられた自分の部屋に戻るしかない。

千佳は三階から五階へ階段を駆け上がり、“蓮の間”へ続く長い廊下を走つた。だが、自分の部屋の前で一人の男性がドアを見つめ佇んでいるのに気付き、千佳の足がピタッと止まる。その男性は千佳の名を呼んではいない。だが、千佳はその男性が振り返るよりも早く身を翻した。

今度こそ、千佳の目から涙が零れた。
日本酒を飲みすぎたせいで気分が昂ぶつっているのよ——と自分に言い聞かせながら、千佳は上司数人にしか割り当てられていないスペシャルスイートへ続く廊下へ逃げた。こちら側の廊下に千佳がいるとは、誰も思わないだろう。

さらに奥へ進むと、部屋が広くなつたことを示すように、小石の上に架けられた小さな太鼓橋の間隔があいていく。さきほどまで千佳がいた廊下とは違つて、人の気配が全くしない。ここでしばらく隠れていれば安全だろう。肩で息をしながら壁にもたれてジッとしていると、静かな廊下にス

リップで歩く音が響いてきた。

「もう、イヤ！」

悲痛な声が、千佳の口から漏れる。こんなことになるのなら、茂庭や北川と一緒にいた方が安全だつた。だが、そう思つてももう遅かつた。

一度後ろを振り返り、誰の姿もないことを確認してから、千佳は走り出した。周囲に目を配る余裕なんて全くなない。もう一度振り返つて誰の姿も目に入らないことを確認し、スペシャルスイートの一室の前を通り過ぎようとした……まさにそのときだつた。

いきなり誰かに腕をきつく掴まれた。恐怖から甲高い悲鳴を上げそうになる。だが、腕を掴んだ人物を見て、悲鳴は喉の奥に搔き消えた。

ここにいるはずのない人が、今日の前にいる。問いかけるように、だが同時に情熱を燃らせて千佳を見つめるその瞳。何も言えず、千佳は泣きながら彼の胸に飛び込んだ。

「……つ、優貴！」

身を投げ出すようにした千佳を、優貴はしつかりと抱きしめてくれた。彼の温もり、彼が愛用している香水の匂いに、またも涙が込み上げてくる。

いきなり取り乱してしまつたから、優貴はいつたい何があつたんだろうと思つているに違ひない。にもかかわらず、優しく千佳を抱いて「部屋へ入ろう」と囁いてくれた。優貴の言葉に頷くと、千佳は彼に促されるまま開け放しになつている目の前の部屋に入つた。

千佳が泊まる“蓮の間”とは比べ物にならないぐらい広く、使われている家具の材質も見ただけ

で違うとわかるほど豪華だった。

いつもの千佳なら、そういうものに目移りしているはずなのに、今は目もくれず、優貴に抱きついたまま離れようとしている。彼の腕に抱きしめられることで、ようやく安心することができたからだ。誰も助けてくれないと思っていたのに、ここにいるはずのない優貴がパニッケに陥った千佳を助けてくれた。

黙つて千佳を抱きしめてくれることに感謝しながら、千佳はゆっくりと優貴から身を離した。鼻をすすぐ、そつと面を上げて優貴の顔を仰ぎ見る。

「どうして……、ここにいるの？ 東京にいるんじゃなかつたの？」

「千佳が東京からすぐのところにいるのに、どうして行かずにいられるんだ？」

優しい笑みを投げかけてくる優貴。優しくされたいけれど、それ以上に激しく求めてほしいという欲求が込み上げてくる。交感神経を刺激するアドレナリンが放出されているのか、千佳はいつも増して、大胆に軀を押しつけた。

全てを奪つて——と誘うように、千佳は背伸びをして彼の首に手を回し、そつと自分の方へと引き寄せた。千佳の求めに応じて、優貴の唇が下りてくる。優しく啄むようにキスをしたかと思えば、彼は急に呻き声を漏らした。千佳の唇を割つて舌を滑り込ませると、何かを伝えるように、彼の熱いねつとりとした舌が口腔で動き回る。一人の舌が絡まり合つた瞬間、千佳の軀がブルッと震えた。期待するように下腹部が熱くなり、秘部が勝手に戦慄き始める。

「つあ……」

喘ぎ声が優貴の口腔に吸い込まれると、彼は深いキスをやめて、千佳のふつくりと膨らんだ唇に舌を這わせた。

「……どうして、逃げてた？ 何が千佳を怖がらせたんだ？」

そのときのことを思い出すと、また脅えに似た震えが走つた。優貴の温もりに包まれて安心したくなり、千佳は彼の胸元にそつと顔を埋める。

「千佳？」

優貴が答えを促してくる。千佳は彼の腕に抱かれながら、真実を話すべきかどうか迷つていた。もし話したら、自意識過剰もいいところだと笑われるかもしれない。千佳でさえ信じられないことが起こつたのだから。

「……正直に答えるんだ。何かに脅えている千佳を、俺が放つておくと思っているのか？」

優貴は決して理由を聞くまで諦めないと本気で知りたいと思つたことを、彼はあいまいなまことにしたりはしない。

千佳は観念すると、笑われるのを覚悟してゆつくりと口を開いた。

「会社ではわたしなんて見向きもしなかつた人たちが、何故かいきなりわたしに声をかけてくるの。しかも、あとを追いかけてくる人もいれば、部屋の前に立つてる人もいたわ。皆、頭がどうにかなつてしまつたみたいに！」

優貴に肩を掴まれ、そつと後ろに押された。二人の間に隙間ができる。優貴が身を屈めて千佳の顔や首、胸元を舐めるように見つめた。そして、長い吐息を一つ。